

# 郷土室だより

第93号

平成8年9月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 08-035

## 中央区の「橋」

(その3)

### ◇橋の修理

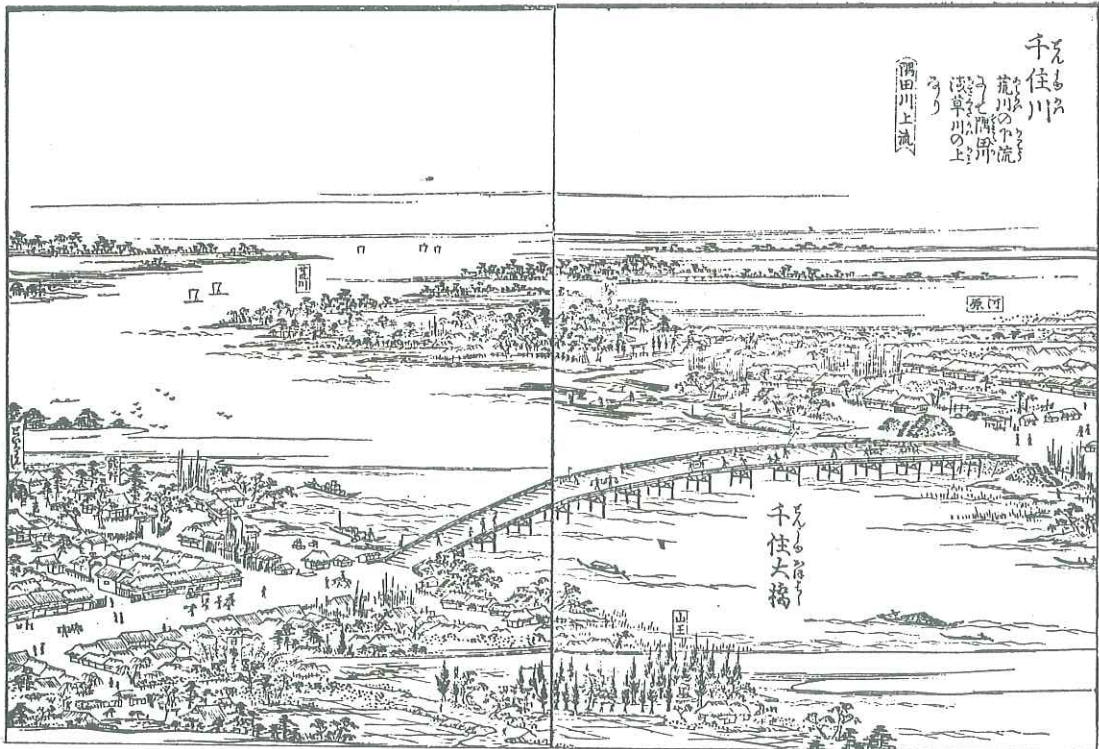
これまでに主に上州沼田城主の真田信利が起した「両国橋橋材事件」をとり上げてきたのですが、その興味の中心は、当時の上州沼田でどれ位いの巨木が調達できたかということにありました。

そのことに具体的にふれる前に、寛文元年（一六六一）にできた両国橋は、天和元年（一六八一）に流出するまでの約二〇年間、絶えず清掃や手入れや修理（いまでいうメンテナンス）が行われていました。これは両国橋に限ったことではなくて、すべての橋に共通していたことはいまでもありません。

両国橋の場合、寛文十二年（一六七二）に比較的大規模な修理が行われています。この橋の維持・管理はすべて幕府が行ったのですが、その場合も材料・工事は入札で民間業者に請負させる方式でした。

それはつぎの項目に分けて六月二十日に、入札の公告（町触）が行われています。

- 一、橋杭、梁行、桁敷、高欄一色（式）
- 一、橋男柱袖やらい石二成ル。
- 一、釘銚、金物銅共二。



『江戸名所図会』より

- 一、橋懸ケ手間、品々并蔦口ノ者、日用人足。
- 一、仮橋并惣もがり、奉行小屋そんな料。

この五項目について簡単につけ加えますと、はじめの一は橋の構造材一切と、高欄つまり橋の上の両側の手すりの用材。

つぎが橋のたもとと柱とそれに続く袖矢来そでやらいに用いられる石材で、それまでは木造だったものが石材でつくるようになったことを物語っています。

三番目は橋の建設に必要なすべの金物（釘・かすがい・金物・銅金物など）

四番目は橋作りの大工をはじめとする技術者と、部材を運搬したり組み立てたりする嵩職と、それらの職人の補助作業をする日雇い労働者などの人件費一切。

五番目は仮橋の費用、工事場の周囲をかこむ「もがり」||現在のフェンス・防災幕、鉄板塀に相当するものと、奉行をはじめとする工事担当者の事務所の借賃などで、請負業者が正確に見積りを計算できるように、分野別にわけて市民

に公示したわけです。

そして入札日時、入札会場（関東代官の伊奈半十郎忠常の役屋敷の広間で仕様書を公開しています）を明らかにしています。

このような町触の公示、代官と応札者間の実務の一切は、江戸市政の町人側の代表者である三人の町年寄が行ないました。

◇用材の質と寸法

この町触の約二十日後の閏六月十一日に町年寄三人が、橋の用材についてつぎのような意味の町触を出しています。

まず用材の質ですが、「ひのき、つぎ、いば」の三種の内と指定しています。

寸法については京間という長さの基準を明示したうえで、

- 長さ九間半 || 一八・七二尺
  - 末口（丸太すまぐち棒の梢の方の切口の直径）二尺八寸三分 || 約八五・七五寸
  - 八間半 || 一六・七四尺
  - 末口二尺二寸三分 || 約六七・五七寸
- 以下末口は同じで

八間 || 約一五・七五尺

七間半 || 約一四・七七尺

七間 || 約一三・七八尺

六間半 || 約一二・八〇尺

六間 || 約一一・八一尺

五間 || 約九・四八尺

四間半 || 約八・八六尺

四間 || 約七・八七尺

このような長さの材木があれば「太さ一本に付」の値段書をつけて奈良屋（町年寄のうちの一軒）役所に断る（報告する）こと。と

いったおふれを出しています。

ただしこれらの材木は「朽ぬけ、節ふしや折れ」があるものは正直に申告することは勿論のことだとも

いっています。

注 末口物

長さ四間以上で末口の径が一・五尺以上の丸太材のこと。

なお、根元に当る部分の切り口を元口といえます。

この長さと太さの用材が、前号でみた「江戸百」に描かれた主要な川に架けられた橋杭の標準的な寸法でした。

鉄道も自動車もない時代に、どの産地から江戸に運ぶにしても、

いちばん短かい四間ものの丸太の場合でも陸上輸送ではまず不可能なことだと考えられます。

現在ではかなり珍らしくなった杉並区特産だった足場用の丸太 || 杉並丸太のように、元口がせいぜい一五センチ位の太さのものでしたら、その重さは大八車に乗せて運べる重さですが、末口約八五センチの丸太といえは元口の方は九〇センチ以上になるのが普通のことです。から、最長の九間半つまり一九メートル前後の二ヶ抱えもある巨材の運搬には、どうしても水上輸送に頼らなければならなかったことでしょう。

◇千住大橋のこと

このような橋材の大きさは、今からみても実に巨大なものであったことがわかります。さらにその材質——具体的には先に見た「ひのき、つぎ、いば」——として槇まきなどの樹種の違いがあります。

橋杭といっても真水ばかりの川の場合と、両国橋・新大橋・永代橋で代表される汐入り川の場合では、その腐蝕の度合いが異なるわ



けで、当時の橋梁技術者は橋の位置によって橋杭の材質を考慮していたことが、これから紹介する千住大橋の記録からわかります。

以下、直接そのことにふれる前に、千住大橋について簡単にまとめ“をすることにします。

この橋がかけられたのは天正一八年（一五九〇）八月に徳川家康が江戸城に入ってから、四年後の文禄三年（一五九四）九月のことでした。それは家康としては関東における最初の大きかりな架橋工事だったのです。

もちろん江戸城はじめその周囲の集落を、城下町として整備するために、小規模な河川や池・沼・掘り割りなどに橋をかけたたり、かけなおしていることはいうまでもありません。

しかし武蔵野台地（江戸城もその台地のごく一部の出っばりを利用したもの）を北から東にかけて大きくめぐる下町低地を流れる大規模な川に、橋を架けたことは何といってもこの千住大橋の工事をはじめてのものでした。

この橋のちに五街道という制度が出来た時に「奥州道中」（宇

都宮までは「日光道中」と同じ道）と呼ばれた幹線道路の江戸側の大橋としてかけられました。

◇ 天下普請の橋

豊臣秀吉が小田原の北条氏征伐後に家康を江戸に配置させる方針は、関東から東北地方までを上方の天下人の勢力範囲に取り込むための一貫した政策でした。

したがって家康は何をさておいても「東北」への軍事行動の基礎となる「奥州道中」の整備を急がなければなりません。千住大橋架橋は前号で説明したような天下普請としての性格が非常に濃いものでした。

これに対して江戸の南方の「東海道」筋の場合、多摩川河口に六郷橋仮橋がかけられたのは慶長五年（一六〇〇）ですから、当時としてはどちらの交通路整備が急務であったかがわかります。

なお、六郷橋はその一三年後の慶長一八年（一六一三）に本格的な橋に改架されていますが、やがて貞享五年（二六八八）七月二十一日の洪水で流された後は、ふた

たび架橋されることなく渡し船にたよって明治を迎えています。

しかし、千住大橋の方はほぼ江戸全期間を通じて存在していました。

◇ 荒川の瀬替え

千住大橋の下を流れる川は現在は荒川の支流の隅田川となっています。

正確には河川法の改正で昭和四十年四月一日から、それまで岩淵水門（北区）から分流していた荒川放水路という人工河川が荒川となり、寛永六年（一六二九）以来荒川と呼ばれていた自然河川の流路が荒川支流隅田川になりました。

この岩淵水門から上流の「荒川」は、本当は入間川という川でした。くわしい事は省略して川の名の変化の結果だけを述べますと、寛永六年に幕府は秩父盆地に寄居一熊谷と流れた荒川を、現在の熊谷市東南部の佐谷田付近で、入間川水系に合流させる工事を行いました。これが「荒川の瀬替え」と呼ばれたもので、それ以後合流点から下流の入間川は「荒川」と改

称されました。

水源を取られた本来の荒川は元荒川となつて、大宮台地一埼玉平野を経て東京下町低地を流れました。

この荒川の瀬替えの理由は、川越と江戸の間の水運を確保するために入間川の水量を増やすことが目的でした。幕府の感覚では時たまの洪水被害を心配するよりも、日常的・継続的な輸送手段の確立を優先させたものだったので。

なお現在の「荒川」と入間川の合流点は、川越市東部の上江橋付近にあります。

◇ 入間川と隅田川

東京最古の寺である浅草寺は、ほかならぬ入間川河口に開かれました。また律令制時代にヤマト政権は諸国に分布していた渡来人の集団を、何回にも分けて武蔵国に移住させた経路も、この入間川の流路そのものだったのです。今も残る新座（志木）・高麗といった郡名や地名にそのことが色濃くうかがえます。

さらに江戸っ子が尊崇する平

将門も、大宮台地方面から入間川を越えて武蔵野台地に取りつく場所に小豆沢（板橋区）に湊をつくったことが伝えられています。

また、治承四年（一一八〇）に源頼朝が武蔵国に始めて上陸した地点も小豆沢湊に続く場所でした。このように入間川は武蔵国の歴史の舞台によく登場するのですが、「荒川」と改称されたためにその存在がすっかりボヤけてしまいました。

家康が千住大橋をかけた当時の川は、この入間川だったことはいうまでもありません。

入間川右岸、つまり浅草寺側の陸地の対岸は、江戸期には寺島（向島）が拡がり、その北部には元荒川の支流である綾瀬川や、今の足立区と葛飾区の区境いを流れた「古隅田川」（これも元荒川の末端）などが流入する大きな入江でした。

すみだ川は隅田川・角田川・墨田川・すみだ川などの書き方が古くからありますが、多くの記録などをみますと「すみだ川」は下総国（千葉県）側からの表現で、つまり下総の西隅を意味するものよ

うです。

これは古い東海道が相模—安房—上総—下総—常陸と続き、武蔵国ははじめは東山道に所屬していたことと関連するようです。

江戸幕府の公文書では現在の隅田川は一貫して浅草川と呼び、その河口部、つまり中央区の東部の部分をとくに「大川」と呼んでいた事実が無視できません。

◇松から横へ

両国橋が始めてかけられた年から五年後の寛文六年（一六六六）三月、千住大橋は三度目のかけかえを始めました。文禄三年からの年まで七六年間ですから、約二五年に一回かけなおしているわけです。

工事は例により代官伊奈半十郎忠常邸で「橋材木、大工、木挽、釘金物、手伝人足、其他諸色」と「橋台石垣」費用の入札が公示、実施されています。この時の工事は「橋台石垣」の項目が別途に上がっていますから、橋そのものの改架だけではなく、橋の位置も多少変更されたことが推測されます。

そしてこのかけなおしと同時期のものではないのですが、つぎのような記録が残されているので紹介することにします。

それは寛文六年の五七年後の享保八年（一七二三）十二月二日付けで千住大橋の地元である小塚原橋戸町（現荒川区南千住）の名主の書いた「千住大橋来歴之事」という記録です。原文を省略して要旨だけ紹介しますと、

- 1 寛文六年十一月の工事が三度目のかけかえである。
- 2 何回、橋杭を「振直し」したか、また今の橋杭になつてから何年たったか。また「船の如く裏二たで候て振辻候哉」「虫附不申分」お尋ねにつき申上候（「」内は原文のまま）
- 3 三度目の大橋の橋杭は松で、十八九年中に腐りました。

というものです。

松という材木の耐用年数は橋の場合二〇年たらずだという案外なデータが知られていたわけで、それを裏書きするように、四度目のかけかえは寛文改架の一七年目の天和三年（一六八三）九月にはじ

まっています。

その時に橋杭はすべて檼材に転換したため、小塚原橋戸町の名主の書上げによると享保八年（一七二三）まで四〇年になるけれども「今もつて腐り申さず候」といっています。

伊勢神宮の二十年目ごとの式年遷宮も、皇居の和田倉橋・平川橋などの木橋が、ほぼ二十年前後でかけかえられている理由は、日本人の建築に対する感覚や技術の伝承のためといった点もあるでしょうが、松材の保ちのわるさという現実もあるようです。

なお前出の「千住大橋来歴之事」の中の「振直し」・「振辻」などについては、のちに改めて取り上げます。（鈴木理生）

東京を語る会のお知らせ

演題 「町は最も親しみやすい 思想」

講師 松山 巖 氏（作家）

日時 平成8年10月19日（土）  
午後2時～3時30分

会場 中央区立京橋図書館

鑑賞室